

Nyonyum 16号

By JICA-VOLUNTEER DAISAKU TAKAGI



協力隊『モチベーション曲線』～報告会を機に、活動を振り返る

7月13日(木)、JICAカンボジア事務所で、『海外協力隊中間・最終報告会』が行われました(私の『中間報告会』は3月に実施済み、第13号で紹介)。年に3~4回開かれる報告会は、**仲間の発表を聞き、自身の活動を振り返る機会**でもあります。今回、残り任期の活動意欲につなげられたらとの思いもあり、協力隊活動1年3ヵ月の**感情曲線『モチベーション曲線』**を作成してみました。協力隊活動、全てが順調に進んでいくわけではありません。今となっては懐かしい辛かった/苦しかったあんな場面、こんな場面を乗り越えて、今があります。



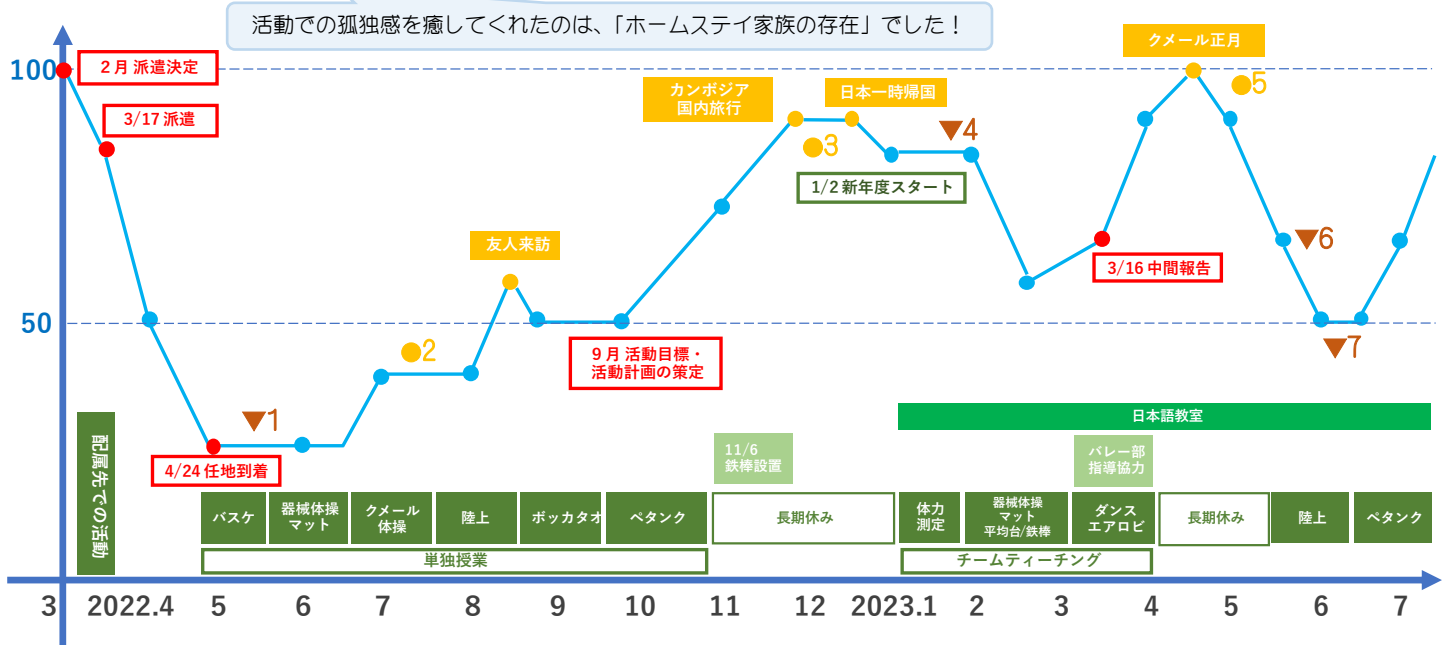
▼1 赴任2日目から、語学もままならない中、中学1年生の授業を一人で担当。現地の先生のサポートもなく、孤独感や伝えたいことが伝わらないもどかしさを日々感じていました。毎朝、学校への足取りは重く、当時のメモには、「何のためにここに来たのか」「ただ利用されているだけではないのか」と、ネガティブなコメントばかり。念願叶っての協力隊活動、「今は辛抱、必ず道は開ける」と、葛藤の毎日でした。。。 (下に続く)

●2 生徒たちとの関係性が徐々に構築され授業も軌道に乗り始めた時期。また友人が任地へ遊びに来てくれ、エールをもらったことが大きな励みに!

●3 学校の長期休暇中は、任地を飛び出し、カンボジアの自然や歴史、人々のやさしさに触れたり、また念願のアンコールワットマラソンにも参加したりと、豊かな時間を過ごしました!

●5 結婚式や新年の行事(水かけ祭りなど)への参加、また1月から始めた日本語教室の活動も軌道に乗りはじめるなど、どんだん地域に飛び込み、地元の方々との交流を楽しみました!

▼6 長期休業明け、先生方のモチベーションが低い。授業に来ないことも再び多くなりました…後に前期末試験を控えていたことが要因の一つだと判明



現地の先生から、体育着を忘れていた生徒が多い現状を見て、「指導が甘い。もっと厳しくすべきだ」と、生徒の前で叱責されることもありました...生徒に、慰められてしまいました☺

また週6日の常時30度を超える炎天下での授業は、北海道出身の私の身体にはかなりきつく、昼寝と日曜日の休息で、体調を整えていました。この時期、地域に飛び出し交友関係を広げよう、という余裕とパワーが全くありませんでした...

▼4 新年度は、要望が通り、現地の先生とのチームティーチングで、互いの指導技術の向上を目標に、活動がスタートしました。しかし1ヵ月も経たないうちに、「忙しいから授業をやっておいてくれ」と突然言われることや、連絡もなく授業に来ないこと、があまりにも多くなり、その対応に苦慮。それでも、要望に応えることも『異国の地での信頼関係構築の一步となる』と自分に言い聞かせ、前向きに活動に取り組むよう心がけました。

▼7 炎天下での授業が続いたこと、また日々の活動に加えて、配属先以外の学校での体育の指導普及の活動の準備を進めるなどの忙しさが重なり...疲れが取れない毎日。そして体調も崩し気持ち落ち込んでしまいました...思い切って、数日休ませてもらいました。

パートナーの先生から、「お大事に。サク(学校での呼称)と一緒に授業をするのは楽しい。待っている」とのメッセージをもらい、元気づけられました!!!

さて、残り約8ヵ月の活動では、どのような『モチベーション曲線』を描くことになるでしょうか?



『見方・捉え方の変化』で、活動を充実させる！？

派遣前の二本松訓練所(福島県)や JICA カンボジア事務所での研修では、現地へ赴任後約半年の間で、「相手が何もしない」「当初の要請内容と実態が異なっている」「私には何も期待されていないのではないか」「自分は何のためにここに来たのだろうか」などと、協力隊に応募をした時の強い気持ちが揺らぎ、悩む時期が訪れることがあると言われていました。私自身、「文化も習慣も異なる異国の地で、何が起こるかわからない、思い通りにはならないのが協力隊活動」と頭では理解していましたが、約2年も待った協力隊活動への期待値が高かったこともあり、「技術を伝えるにたはずなのに、“マンパワー”を求められている」「2年という限られた時間しかないのに、思い描いていた活動とはほど遠い」と現実と理想とのギャップに、悩んでしまいました。(2022年5~8月)

この葛藤の時期を乗り越えた分岐点は、大きく二つありました。一つ目は、あるセミナーに参加したことがきっかけで、カンボジアの文化、習慣、学校の仕組みや教育システムなどを調べノートに整理をしているうちに、(気を付けていたはずなのに) **日本的視点・感覚で、ものごとを捉えてしまっていた自分の姿が浮き彫りになり、「まずは、相手の価値観や置かれている状況を正しく理解することこそが、活動の土台となる。辛抱」と思い直した**こと。二つ目は、“マンパワー”という状態を、「**異国の地で、一人の教員として子どもたちと関わることで、またとないこの時間を大切にしよう。言葉は通じないけれど、子どもたちの可能性を拓くサポートをしよう。それこそが、教員としての面白さではないか**」と捉えなおし、そして、「**自分が関わっている“子どもたちの姿”を見てもらうことで、周囲の先生方に何か気づきを与えられたらいいのではないか**」という発想になれたことでした。今では、多少の困難があっても、『**多様な見方・捉え方**』で、カンボジアでの日々の生活・活動をより前向きに取り組んでいます！

「協力隊」という“つながり”を生かして！！

報告会の開催に合わせて、有志の隊員で構成する「**分科会**」*1を行うことがあります。今回、私が所属する「**情操教育分科会**」(職種:体育、サッカー、小学校教育、青少年活動のメンバーで構成)では、主にカンボジアの体育教育の普及を目指して活動を行っている NGO「**ハート・オブ・ゴールド**」のスタッフをお招きして、「**カンボジアの体育教育の過去、現在、未来**」についてのお話を聴かせて頂きました。



カンボジアの体育教育の歴史や現在の国内での実施状況、また体育教育の指導・普及活動の実際などを知ることで、今後の活動をよりよく進めていくためのアイデアを得ることができました。

*1 「分科会」とは…

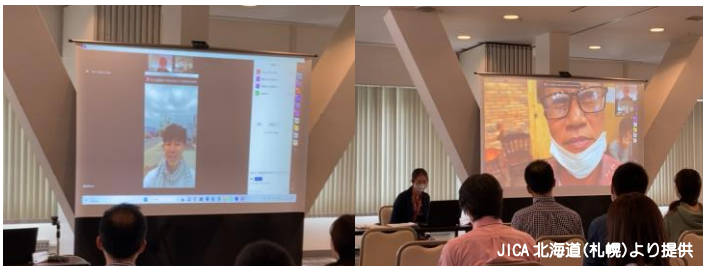
参加は任意。職種や任地を超えた“**つながり**”を生かして、活動をより充実させていこうとの思いで、「理科」「音楽」「算数」「保健」「サッカー」「情操教育」の6つの分科会が活動をしています。各分科会では、これまでに、オンラインでの日々の活動の情報交流、活動の中で制作した教材・教具などの共有、さらにはお互いの活動の視察や協力、協働でのイベント開催などが、行われています。

次回の報告会は10月を予定。その前に、7名の新隊員を8月に迎えます。



『2023JICA 海外協力隊春募集説明会』にて、協力隊員の「暮らし」を紹介！

5月27日(土)、『**2023JICA 海外協力隊春募集説明会(於:札幌)**』にて、現地より生中継で、「協力隊員の暮らし」を紹介させて頂きました。20分という限られた時間の中で、前半は、自宅(ホームステイ先)の周辺、隣接するカフェ内、カフェで働くスタッフや大家さんご家族の紹介。後半は、自宅に潜入し、キッチン(スタッフが昼食中だったため、カンボジア料理を紹介)、リビング、私の部屋(バスルーム含む)の紹介、と日常の生活をありのままに見てもらいました。



「皆さん、こんにちは。今、私は、カンボジアの首都プノンペンとベトナム・ホーチミンを結ぶ国道沿いに立っています」と、現地レポーター気取りで中継をスタート(写真左)。カフェに入ると、大家さんの義理のお父さんが、中継に興味津々。カメラをのぞき込み、クメール語で挨拶(写真右)。札幌の会場では、参加者から笑いがおき、和やかな雰囲気になりました。

会場の皆さんに、「協力隊員として、任地に住むならどのタイプ？」

- ①一人暮らし
- ②ホームステイ
- ③ゲストハウス

と質問を投げかけてみました。9割以上の方が、②に手をあげるという意外な結果でした。(①が多いだろうと予測していました)

皆さんが協力隊員だとしたら、どのタイプの暮らし方を選択しますか？

7月中旬、隊員仲間が任地スバイリエンにはるばる遊びに来てくれました。協力隊員のホームステイでの生活は珍しいと、彼が協力隊活動の様子を投稿しているブログ『**JICA 海外協力隊日記**』に、私のホームステイの暮らしぶりや、私や大家さんのインタビューを写真付きで紹介してくれました。右のQRコードを読み取りぜひ記事をのぞいてみて下さい！



中継の間、様々な手段で情報を収集しながら不安を一つ一つ解消し、協力隊の“道”を決断した当時の自分を思い出しました